

農をテーマにした交流人口拡大のための新たな景観形成方針の検討

〔事業責任者〕

(自治体等側) 常総市市長公室常創戦略課・課長

岡野富士男

(大学側) 茨城大学農学部・講師

高瀬唯

連携先

茨城県常総市

プロジェクト参加者

岡野 富士男 (茨城県常総市 市長公室常創戦略課・課長, 担当: 事業担当責任者)

江面 格志 (茨城県常総市 市長公室常創戦略課・課長補佐, 担当: 企画・立案)

大崎 優 (茨城県常総市 市長公室常創戦略課・係長, 担当: 企画・立案)

富山 和弘 (茨城県常総市 市長公室常創戦略課・係員, 担当: 企画・立案・実施)

根本 大輔 (茨城県常総市 市長公室常創戦略課・係員, 担当: 企画・立案・実施)

高瀬 唯 (茨城大学農学部・講師, 担当: 企画・調査運営・データ解析・景観形成方針の検討)

伊藤 哲司 (茨城大学人文社会学部・教授, 担当: 企画・景観形成方針の検討)

一ノ瀬 彩 (茨城大学工学部・助教, 担当: 企画・景観形成方針の検討)

プロジェクトの実施概要

① プロジェクトの目的

地方移住の促進には、地方の魅力を高めて交流人口を増やしながら、その魅力を訴えていくことが重要である¹。交流人口を増やす要素の1つとして、都会では得られない農が生み出す景観体験が挙げられる(緑あふれるのどかな眺めや、農業体験を通じた緑との触れ合いなど)。この体験を効果的に生み出すためには、農をテーマにした景観形成が重要で

ある。しかし、地域の景観形成の大元となる景観計画の中心は建造物の形や色の規制であり、農をテーマにした景観形成方針の検討はいまだ手薄な状況である。そこで、本研究では、農をテーマにした交流人口拡大のための新たな景観形成に関する方針の検討を行うことにした。

そのような中で、本研究は茨城県常総市に注目した。常総市は、鬼怒川と小貝川に挟まれた広大な水田地帯と丘陵地を生かした畑地帯があり、農を営むのに適した地域である²。一方、2015年の大規模水害(平成27年9月関東・東北豪雨災害)以降、定住人口の増加に向けた交流人口の拡大が課題となっており、常総市総合計画の3大施策の1つに位置付けられている³。これに対し、常総市は圏央道常総インターチェンジ付近を開発し、アグリサイエンスバレー構想という先進的な農のまちづくり(道の駅整備など)を進め、交流人口拡大を目指している。しかし、市外からの訪問者の滞在を増やすためには、常総市内の各所を回遊して様々な農の景観を楽しめる仕組みの整備も必要である。本研究では、特に、既存の農と新たな農を結びつけ、訪問者の回遊を高める景観形成方針を検討し、新たな提案を行うことを目的とした。

② 連携の方法及び具体的な活動計画

上記の目的に対して、常総市と連携をしながら以下の3点に取り組むことにした。

1) 農の景観体験を中心とした地域資源に対する来訪者の評価の把握

- 2) 来訪者の回遊をもたらす農の景観構造の様々なパターンの検討
- 3) 1)と2)で得られた検討結果のうち、どの案が訪問意欲を高められるのかの検証

上記の3つの活動に対して、常総市は、主に、市内の地域資源に関する資料や情報の提供、調査ルートの検討、検討された景観形成方針に対する意見交換への参加を行った。茨城大学は、調査実施、データ解析、景観形成方針の検討、報告書の作成を行った。なお、本プロジェクトでは、景観を「眺め」(visual landscape)と「ゾーニングといった土地の広がり様子」(ecological landscape)の両側面から検討した。

③ 期待される成果

常総市(常創戦略課)へのヒアリングの結果、市の観光機能の整備に関する気運は近年高まり始めたばかりで、試行段階であることが把握された。それに対し、本研究では、常総市の風土である農を生かした観光機能の整備に貢献する有用な知見の構築が期待できると考え、プロジェクトを実施した。

プロジェクトの実施成果

① 活動実績

- (1) 農の景観体験を中心とした地域資源に対する来訪者の評価の把握

1) 手順

調査協力者が実際に常総市内を来訪するモニターツアーを2021年12月1日午後を実施し、地域を実際に巡った際に調査協力者が関心を寄せる農の景観体験を把握した(図-1～図-3))。常総市役所職員の案内を受けながら、石下体育館周辺の畑地(図-1のA)、豊田城および周辺の水田(図-1のB)、アグリサイエンスバレー開発地(図-1のC)、あすなろの里を巡った(図-1のD)。ツアーに参加した調査協力者は農学部の講義「設計製図」の受講者15名である。訪問時期に体験できない景観や時間の都合で訪問できないスポット

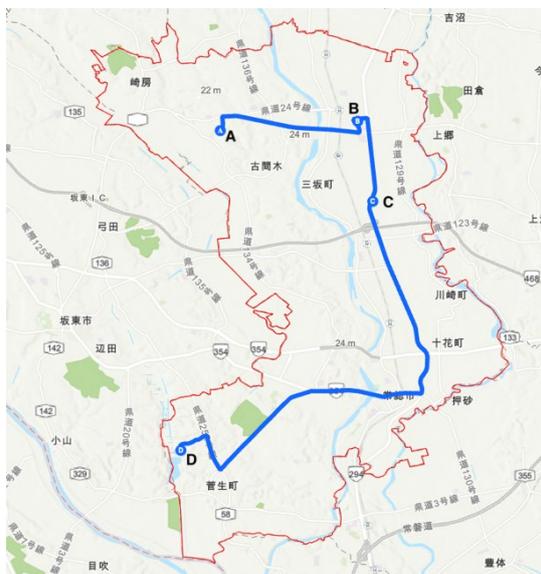


図-1 現地調査の回遊ルート(ArcGIS Pro⁴で作成)



図-2 モニターツアーの様子(石下体育館周辺の畑地)



図-3 モニターツアーの様子(豊田城の展望台)

は、事前に360度カメラで動画撮影をし、調査協力者へ共有した。

モニターツアーで撮影した景観画像および共有した360度動画について、気になった理由や得た印象などを調査協力者に回答してもらい、景観評価を行った。調査協力者は17名であった。そのうち、2名はモニターツアーに参加しなかったため、共有した360度動画やGoogleマップの中で気になった景観を評価してもらった。撮影した景観画像のうち最低5枚を選んでもらい、その景観について5つの観点で評価してもらった。具体的には、1) 気になった景観とその理由、2) 景観や空間から得たイメージや印象、3) 魅力的な要素と魅力的にするためにした方がよいこと、4) 他の観光資源との繋げ方、5) 交流人口の拡大のための景観の活用方法である。スペースの都合、本報告書では1)と2)を報告する。

2) 結果

● 気になった景観

気になった景観として、全部で135の回答を得た。回答者数が多かった景観は菅生沼(15人, 88%) (図-4)、鬼怒川(13人, 76%)、アグリサイエンスバレーの調節池(10人, 59%)、豊田城から見た筑波山と水田(10人, 59%) (図-5)、キャベツ畑(9人, 53%)であった。場所ごとに見ると、あすなろの里関係の景観が15人(88%)、豊田城関係の景観が14人(82%)、豊田城から見た眺望景観が14人(82%)、畑地関係の景観が13人(76%)、水田関係の景観が13人(76%)、鬼怒川関係の景観が11人(64%)、筑波山関係の景観が10人(59%)、アグリサイエンスバレー関係の景観が8人(47%)、圏央道から見た眺望景観が5人(29%)であった。

選んだ理由について、回答者数が多かった景観に着目すると、菅生沼では夕陽が映る水面の美しさを理由に挙げている人が複数見られた。他にも、眺望できることや、常総市の



図-4 菅生沼



図-5 豊田城から見た筑波山と水田

れた。また、平成27年9月関東・東北豪雨災害のことを挙げた人も複数いた。アグリサイエンスバレーの調節池では、様々な理由が見られ、共通性はあまり見られなかった。豊田城から見た筑波山と水田では、綺麗に整備された広大な水田が見られることを理由に挙げている人が複数見られた。また、筑波山が見えることを理由に挙げている人もいた。キャベツ畑では、様々な理由が見られ、共通性はあまり見られなかった。

● 景観や空間から得たイメージや印象

景観や空間から得たイメージや印象にて、多く挙げられていた単語は「自然(緑も含む)」(18の景観, 13名による回答(76%))、「廣大(広い, 壮大も含む)」(16の景観, 11名による回答(65%))、「のどか」(12の景観, 7名による回答(41%))、「きれい(綺麗も含む)」(14

の景観、4名による回答(76%)であった。イメージや印象の構造を把握するために、テキストマイニングの共起ネットワークを作成したが、今回の調査においては、各景観に対して複数人の間で同様の景観イメージが共有される様子はあまり見られなかった。要因の1つとして、今回の調査は限られた調査協力者数である中で自由記述による回答を求めたことにあると考えられる。今回得られた単語を用いて、別途SD法による調査を行うことで、人々の間で共有される景観のイメージを明らかにできる可能性が考えられる。

(2) 来訪者の回遊をもたらす農の景観構造の様々なパターンの検討

1) 方法

「農をめぐる」というテーマで、先の調査協力者らに来訪者の回遊をもたらす農の景観構造のコンセプトを検討してもらった。各自が常総市の現状分析を行った上でコンセプトを検討してもらい、さらにコンセプトだけでなく具体的な実現案までも検討してもらった。上記に関する提案発表会を2022年2月2日に実施した。発表会には本プロジェクトメンバーと調査協力者、さらにアグリサイエンスバレー開発関係の事業者が出席した。

2) 結果

来訪者の回遊をもたらす農の景観構造のコンセプトについて、18名の調査協力者から提案を受けた。受けた提案内容は多岐にわたっていたが、内容で大きく分類すると、「農業体験そのものを対象にしたコンセプト」と「農の空間を様々な手段で楽しむコンセプト」が見られた。

提案をまとめると、前者に当てはまる具体的なコンセプトは「畑や田んぼを借りて気軽に自分のペースで農作業をするための景観」、「農作物の収穫と加工の両方を体験するための景観」、「バスツアーで市内の様々な農業体験をめぐるための景観」などである。後者に

当てはまる具体的なコンセプトは「里帰りのように古民家でリラックスした時間を過ごすための景観」、「展望台に登って筑波山を背景とした広大な水田を楽しむための景観」、「農地や空が広がる場所で、スポーツを楽しむための景観」、「地元で採れた食材を使った料理を楽しむための景観」などである。

(3) 訪問意欲を高められる案の検証

1) 手順

リサーチ企業の株式会社マクロミルが提供しているセルフアンケートツール「Questant」を利用してオンラインアンケート調査を実施した。調査タイトルを「観光に関するアンケート」とし、2021年2月に行った。Questantで利用可能な、GMOリサーチ株式会社が運営する国内最大級のインターネットリサーチ用パネル「Japan Cloud Panel」に登録されているモニターを対象に行った。サンプル数は300人とし、実際には331人から回答を得られた。回答者は、具体的には、茨城県、千葉県、埼玉県、東京都の在住者とした。この4都県の在住者とした理由は、常総市に隣接する地域または圏央道でつながっていることを考慮したことによる。また、各都県にて、20代・30代が合計30人、40代・50代が合計30人、60代が15人になるように回答を回収した。調査項目は大きく5種類に分けられる。回答者の属性(人口統計学的属性、観光の嗜好、茨城県や道の駅への来訪経験など)、常総市に対する認識と行動、見てみたいと思う農の景観、やってみたい農の観光体験、使いたい移動手段の5つである。スペースの都合、本報告書では一部の結果について報告する。

2) 結果

● 観光の嗜好

10種類の観光に対して、「あなたが好きなタイプの観光はどれですか。」と質問した(図-6)。10種類の観光については、日本交通公

社が実施した調査『JTBF 旅行意識調査』⁵内の質問「行ってみたい旅行タイプ」で回答数上位の選択肢と農村関係の選択肢を用いた。「とても好き」と「やや好き」を合わせて「好き」と捉えた場合、「美しい町並みを楽しむ観光」(288名, 87.0%), 「おいしいものを食べる観光」(293名, 86.1%), 「海辺や高原といったリゾート地でゆったり過ごす観光」(278名, 84.0%)が上位となった。他の選択肢も概ね7以上の回答者が「好き」と回答していた一方で、本プロジェクトの主旨に対応した観光である「農山漁村に滞在し農林漁業やふるさと体験を楽しむ観光」は「好き」と回答した人が最も少なく、半数にも満たなかった(118名, 35.6%)。

● 見てみたいと思う農の景観

「もし常総市内を観光することになった場合、見てみたいと思う風景はどれですか。」と質問し、(1)の景観評価で挙げられた景観を

用いながら17の景観画像を示し、当てはまるものを全て選択してもらった(図-7)。

最も多くの回答者に選択された景観は「豊田城(アップ)」(153名, 46.2%) (図-8)で、5割近い選択率であった。続いて、「長塚節の生家」(73名, 22.1%) (図-9), 「あすなるの里の里カフェ」(73名, 22.1%), 「あすなるの里のカフェのベンチと菅生沼」(68名, 20.5%)が多かったが、2割強の選択率にとどまった。なお、年齢層や居住地による選択の傾向の大きな違いは見られなかった。

● やってみたい農の観光体験

「もし、常総市内を日帰りで観光することになった際に、やってみたいと思う観光体験はどれですか。以下の選択肢から3つまでお答えください」と質問し、10の観光体験のうち、当てはまるものを3つまで選択してもらった(図-10)。最も選択が多かった農の観光体験は「地元で採れた食材を使った料理を楽

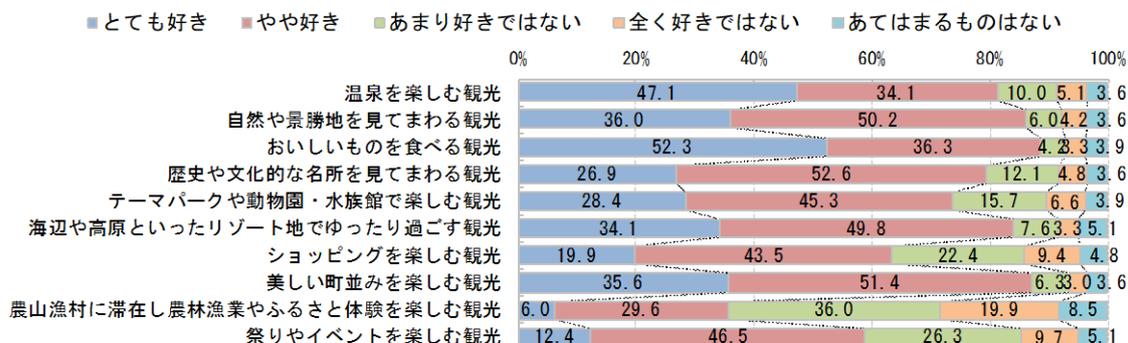


図-6 観光の嗜好

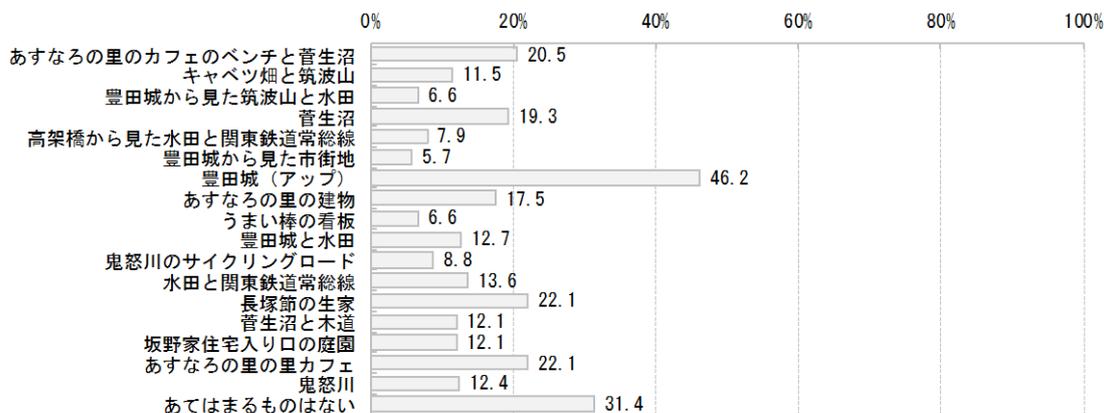


図-7 見てみたいと思う農の景観

しむグルメラリーに参加する（色々な飲食店をめぐる）」（100名、30.2%）で、3割の回答者が選択していた。同様に3割程度の回答者が選択したものは、他にも「展望台に登って、筑波山を背景とした広大な水田の景色を楽しむ」（88名、26.6%）と「美しい夕日を眺めて、1日の終わりをリラックスして過ごす」（85名、25.7%）が該当した。年齢層別にみると、写真映えしそうなスポットをめぐる体験については、年齢層が若い30歳代以下が他の年齢層よりも選択される傾向が見られた。居住地域別については、大差は見られなかった。



図-8 豊田城

● 使いたい移動手段

「常総市で観光をすると想定してください。新しくオープンする道の駅を起点に常総市内の観光スポットをめぐるとした際に、あなたはどの移動手段を使いたいですか。」と質問し、10の移動手段に対して、それぞれ「非常に使いたい」、「やや使いたい」、「あまり使いたくない」、「全く使いたくない」、「よくわからない」

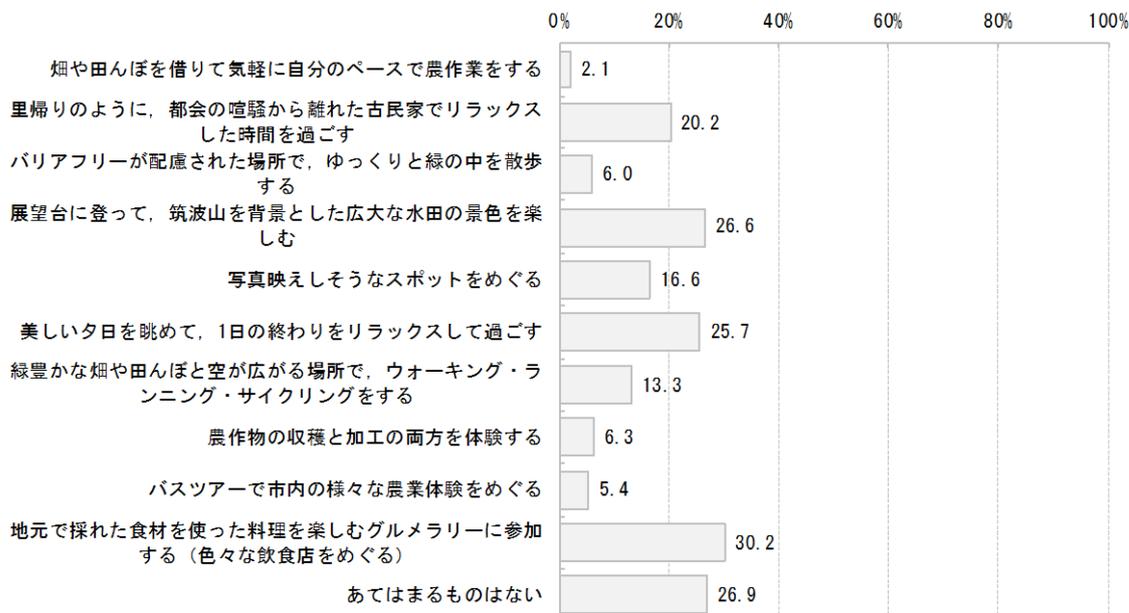


図-10 やってみたい農業体験



図-9 長塚節の生家

い」のいずれかを選んでもらった。「非常に使いたい」と「やや使いたい」を合わせて「使いたい」と捉えた場合、「自家用車」(223名, 67.4%),「徒歩」(195名, 58.9%),「電車」(182名, 55.0%)が上位となった。これらは半数以上の回答者が使いたいと回答した移動手段である。年齢層別にみた結果, 使いたい移動手段の傾向に大差は見られなかった。居住地域別にみた結果, 自家用車で傾向に違いが見られた。東京都在住の回答者は, 他の県の在住者と比べて自家用車を使用したい人の割合が低かった。

3) 考察

本プロジェクトの主旨に対応した観光である「農山漁村に滞在し農林漁業やふるさと体験を楽しむ観光」では「好き」と回答した人が最も少なく, 半数も満たなかった(118名, 35.6%)。既存調査の『JTBF 旅行意識調査』の2.5%という結果と比較すると, この割合は決して低いわけではなく, むしろ割合が高い結果であった。しかし, この傾向を考えると, 農をテーマにした観光の際には, 農村・農業体験だけでなく, 他の観光テーマと組み合わせながら行う方が交流人口の増加につながる可能性がある。とくに農と関係が深い食については, 「おいしいものを食べる観光」(293名, 86.1%)が上位であったことから, 農と捉えるよりも食という広めのテーマで捉える

ことで来訪者の増加につながられるだろう。訪問意欲を高められる農の景観構造として, 食という広めのテーマで景観を捉えること大事となってくる可能性がある。

見てみたいと思う農の景観は, 農を主にした景観はあまり選択されなかった。しかし, 最も選択率の高かった豊田城は常総市の水田を筑波山とともに一望できるスポットである。また, 空気が澄んだときには富士山も眺望でき, 関東平野という景観を感じられるスポットでもある。したがって, 農をテーマにした交流人口を高める景観形成では重要なスポットとなるだろう。

選択が多かった農の観光体験については, 「地元で採れた食材を使った料理を楽しむグルメラリーに参加する(色々な飲食店をめぐる)」という, 先にあげた食をテーマにした観光体験である。また, 「展望台に登って, 筑波山を背景とした広大な水田の景色を楽しむ」は, 先の最も選択率の高かった豊田城に関わる体験である。「美しい夕日を眺めて, 1日の終わりをリラックスして過ごす」については,

(1)の調査結果で示したとおり, 菅生沼や鬼怒川で体験できるものである。これらをうまく組み合わせることで, 常総市の特定の場所に偏ることなく, 石下地域と水海道地域の両方を回遊できるような農の観光を創出する景観形成ができる可能性がある。とくに「地元で採れた食材を使った料理を楽しむグルメラリーに参加する(色々な飲食店をめぐる)」については特定の場所に偏らずに実施できる可能性があるため, 回遊のためのネットワークになれる可能性を秘めていると考えた。それを後押しする調査結果として, 移動手段として自家用車の希望が多かったこともあり, 来訪者からみても移動に無理のない観光ができると考えた。このことから, 景観形成にあたっては, 道路(ルート)が景観の骨格を作る重要な役割を担うであろうと考えた。

4) 成果報告会での意見交換

2022年3月にZoomを用いて成果報告会を実施し、意見交換を行った。本調査の結果に対して、まず、今回は都県単位で居住地別の評価傾向を分析したが、同じ都県内でも常総市と似た景観がある地域とそうでない地域に住む市民では評価が変わる可能性があるため、さらに詳細な分析を行う方がよいという意見が出た。次に、農に関する体験は行いたい人とそうではない人のニーズの差が大きい可能性があるという意見が出た。そして、常総市役所で認識している景観評価とオンラインアンケートの結果にギャップがあるという意見が出た。これに対して、提示された景観写真によって評価が左右された可能性が指摘された。この解決策の一手段としては、12月に実施したモニターツアーは、評価者が実際に景観を目にした上で行った評価であるため、オンラインアンケートの結果だけで判断するのではなく、モニターツアーの結果と照らし合わせながら再検討することが考えられる。

② プロジェクトの達成状況

活動実績に示した通り、各調査は概ね計画通りに本プロジェクトを行うことができたと考えられる。最終成果報告書については、おおよそ作成が進んでおり、関係者各位の同意を得られ次第、社会にむけて公開する予定である。

各調査は完了した一方で、学術誌への論文投稿には至れなかった。今後は、追加の調査をした上で、得られた研究成果を学術誌へ論文投稿する準備を進める必要がある。

③ 今後の計画と課題

今回の調査結果は限られた評価手法やサンプル数で得た結果のため、必ずしも確定的な結果とは言えない点に留意する必要がある。今後は以下に挙げたような調査を進めた上で、結果の精査が必要であることを申し添える。

- 1) モニターツアーを行った時期が12月であったため、冬季以外の農の景観体験については景観評価できていない。研究の発展のためには、他の季節の農の景観体験の評価が必要である。
- 2) 今回は訪問先を固定したため、評価できなかった景観がいくつもあり、それらについては別途調査する必要がある。
- 3) アグリサイエンスバレー開発地のオープンは2023年春の予定である。市外からの来訪者が実際に常総市内の農の景観体験をどう評価するかについては、オープン以降に調査する必要がある。

引用文献および補注

¹ 国土交通省 (2015) : 平成26年度 年次報告 国土交通白書, 日経印刷, 423pp.

² 常総市 (2019) : 常総市農業基本計画, 常総市, <<http://www.city.joso.lg.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/56/kihonkeikaku2019.pdf>>, 2019.04.01 更新, 2022.03.03 参照

³ 常総市 (2018) : じょうそう未来創生プラン前期基本計画, 常総市, <<http://www.city.joso.lg.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/52/zennkikihonkeikaku.pdf>>, 2021.07.20 更新, 2022.03.03 参照

⁴ Esri, Intermap, NASA, NGA, USGS, GSI, Esri, HERE, Garmin, Geo Technologies, Inc., METI/NASA, USGS

⁵ 公益財団法人日本交通公社 (2021) : 旅行年報2021, 日本交通公社, pp. 215